

# まえがき

## シンジルト SHINJILT

今年で日本の「狩猟法」(1895年。現行の狩猟法「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」との対比においては「(旧)狩猟法」ともされる)が公布されてからちょうど120年が経ちました。120年という数字は、日本における狩猟やその法制化の歴史の長さを物語ります。ところが、現代の日本においては、狩猟に関する知識を持ち合わせている人はますます減っており、狩猟自体も多くの人々にとっては縁遠いものになりつつあります。特に都市生活の経験しか持たない若い人たちにとって、狩猟という営みは、自分たちと接点がないゆえに、エキゾチックなものとしてイメージされやすく、一種の異文化とでもいえるべき存在となっています。それでは、狩猟をめぐるこうしたイメージで、どこまでその実態を捉えることができるでしょうか。

本報告書は、社会調査実習という通年授業を履修した3年生たちによって書かれたものです。現地調査の実施を通じて、さまざまな方々と出会い、時には共に行動し、そこで得られたデータや経験を活かすことで、自らが生きる現代社会に関する理解を深めていくということがこの授業の目標でした。この目標を達成すべく、調査チームはテーマを狩猟に設定しました。狩猟調査チームと自称するわれわれは、具体的には、自分たちが暮らしている九州熊本の農山村地域における狩猟活動の実態を解明することを目指してきました。

文献研究や事前調査を進めていくにつれて、狩猟調査チームとして取り組むべき課題が大きく分けて3つ浮上してきました。それは、(1)生活を営むための食糧資源として野生動物を捕獲する行為が狭義の狩猟だとすれば、狩猟という実践は具体的にどのような方法と過程で行われているのか。(2)狩猟実践はそれに携わっている人たちの間にどのようなつながりをもたらしているのか。(3)狩猟を介して結ばれた人間集団における自分らしさや世界観のあり方はどのようなものであるか、という3つの課題です。この3つの課題に、正面から向き合おうとしたチームメンバーによって編成されたのが、3つの調査班です。

課題(1)に取り組む第1班の主な調査項目は、狩猟の方法・解体の過程・肉料理の拵がり・猟犬の位置づけ・女性猟師の活躍などであり、課題(2)を取り扱う第2班の主たる調査項目は、猟友会の実情・狩猟コミュニティの形成・地域外部との交流・銃の社会的インパクト・狩猟技術の引き継ぎなどであり、課題(3)に対処する第3班の主要な調査項目は、猟師にとっての駆除・カマガタを飾ることの意義・山の神の現在・縁起ごとにみる狩猟秩序・獣魂碑建立の理由などでした。各班の調査成果は本報告書の各部の内容にそれぞれ対応しており、生業・社会・文化の3つの側面から狩猟実践にアプローチし、その実態を徹視的に記述し分析したのが、『狩猟の民族誌』と題する本報告書です。

本報告書の副題にも明示した通り、狩猟調査チームの主な調査対象地域は、球磨郡の五木村と多良木町、人吉市といった「熊本南部」地域でした(地図参照。P.8)。これらの地域と接点を持ちえたのは、私の突然の訪問であったにもかかわらず快く受け入れてくださった熊本県庁自然保護課の近藤隆志さんと、近藤さんのご紹介で知り合った熊本県猟友会事務局の事務局長蔵原吉弘さん、そして蔵原さんを通して知り合った猟友会人吉支部の

支部長矢上雅義さんとそのお仲間の方々のおかげでした。こうした出会いによって、熊本の狩猟地域における球磨人吉の重要な位置づけをより深く知るようになりました。

一日も早く現場に行ってみたいという私の強い思いを理解してくれた、同僚で社会学者の牧野厚史教授とチームメンバーの村田君と中原君と共に、2日間かけて、球磨人吉（および八代市泉町五家荘）地域において事前調査を行いました。ご自身のビジネスなどで非常にご多忙であったにもかかわらず、宿泊や食事の手配からインフォーマントの紹介、そして山道の運転まで、ほとんどすべての重要な作業を担当して下さった矢上さんのご尽力で、事前調査はとても順調で濃密なものになりました。

矢上さんを介して事前調査で知り合った、猟友会五木支部の支部長犬童雅之さんと上球磨支部事務局の事務局長石田博文さん、および球磨人吉地域の言語文化研究に長年携わってきた前田一洋先生の力強いご支援があってこそ、4日間にわたる本調査もまた万事順調でした。とりわけ3日間滞在した五木村において、チームの調査スケジュールを調整し、球磨地方名物であるシカ肉の骨かじりなどの手料理で狩猟調査チームを歓迎して下さり、チームメンバーが夢見ていた狩猟同行も可能にしてくださったのは、犬童さんでした。

インフォーマントとしても活躍して下さった犬童さんをはじめとする猟友会五木支部の猟師の方々およびそのご家族、石田さんをはじめとする上球磨支部の猟師のみなさんが実体験に基づいて語って下さった内容豊かな狩猟経験譚がなければ、そして、和田村長をはじめとする五木村の村役場（特に教育委員会）や森林組合のみなさんおよび五木阿蘇神社の尾方宮司、三村講介さんをはじめとする人吉市教育委員会や人吉城歴史館のみなさんおよび青井阿蘇神社の語り部の立石芳利さんがご教示くださった数多くの専門的な知識がなかったら、本調査はきっと中味の薄いものになってしまっていたことでしょう。

本調査での経験を踏まえながら、比較の観点で異なる地域の情報を集めるために行われたアンケート調査の際に、対象支部の選定や各支部へのアンケート用紙の配布を担当して下さったのは、蔵原さんをはじめとする熊本県猟友会事務局の方々でした。さらに、蔵原さん、矢上さん、犬童雅之さん、石田さん、前田先生には、われわれの草稿段階での報告書をご確認いただき、さまざまな側面から有意味なコメントと激励のお言葉をいただきました。調査中にお世話になった方々のお名前をすべてあげることができませんが、ここに、お世話になったすべての方々に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

冒頭に私は、今の若い人たちにとって狩猟は一種の異文化になっていると述べました。そのような若者でもあった本報告書の執筆者たちは、しかしながら、社会調査を経験することによって、換言すると「大人」への通過儀礼を経験することによって、狩猟に対する見方を大きく変えたようです。特に、現地における本調査を通じて、それまで抱いていた、例えば「寡黙な猟師たち」、「閉ざされた狩猟社会」、「神秘的な狩猟文化」といったエキゾチックなイメージだけでは捉えきれない現実があることに気付きました。そこにあるのはむしろわれわれと大差のない生活者であり、彼らの社会はわれわれのような外部の人間との関わりにおいて再編しており、狩猟文化の多くも実はわれわれの生活と共存し成立している、ということを実感するようになりました。社会調査で得られたこのような実感こそが、狩猟調査チームの共有財産であり続けるでしょう。なぜならば、それは、「狩猟」にとどまらず、われわれが生きる「現代社会」についての確かな実感でもあったからです。

2015年3月16日